栗田正秀 四倍性ノビルの染色體の形態

Masahide KURITA : On the morphology of chromosomes in tetraploid
Allium nipponicum Franch. et Sav.

昭和19年10月1日受理

ノビル (*Allium nipponicum* Franch. et Sav.) の染色體については、すでに二三の報告があるが、體細胞染色體の形態にかんしては詳細を欠いているので、筆者はこの點をおぎなう意味で下記の觀察をおこなつた。

材料および方法 材料は松山市産のもので、根端を 0.3% 抱水クロラル液で40分間前處理をし、1時間水洗いのち、ナワシン液で固定した。パラフィン切片の染色はゲンチアン紫法によつた。

觀 察 本種の根端細胞において第1圖にしめすように32個の染色體を算定した、この染色體數は盛永及福島(1931)の報告と一致する。これら32個の染色體を形および大きさによつて分類すると、相似る染色體4個宛からなる8群にわかつことができる。1群をなす4個の染色體を縦に1列にならべ、順次各群を横に配列したのが第2圖である。この圖は多數の核板中からえらんだ最良の核板における染色體を香川(1926)のもちいた方法によつて長さを補正してえがいたものである。

第2圖における第I染色體は本種の有する染色體のうちでもつとも長く、染色體のほとんど中央に一つの狹窄がある。第II染色體は中央に一つの狹窄をもっている。第III染色體は第I染色體に似ているが後者よりはやや短く、かつ狹窄の位置が第I染色體にくらべてわずかに一端に近寄っている。第IVおよび第V染色體は中央からやや一端によつた所に狹窄が一つあり、きわめてよく似ている。兩者の區別は困難であるが、後者は前者よりわずかに短いようである。

第Ⅵ染色體は染色體中央からあきらかに一端に近寄つた所に狹窄があり、短腕にきわめて小さい附隨體をもつているので他の染色體とは明瞭に區別できる。第Ⅶ染色體は一端近くに一つの狹窄があり、短腕はほとんど球形をしているので既述の第Ⅰ—Ⅵ染色體との區別は容易である。第Ⅷ染色體は第Ⅶ染色體とよく似ているが後者よりあきらかに短い。

上述のように本種はすくなくとも染色體の形態上からみて構成がおなじな 4 組の染色體をもつているから、片山 (1936) も報告しているように同質四倍體であると結論してよからう。

愛媛師範學校

引 用 文 献

- Kagawa, F. (1926). Cytological studies on *Triticum* and *Aegilops*. I. Size and shape of somatic chromosomes. La Cellule **37** : 231—323.
- Katayama, Y. (1928). The chromosome number in *Phaseolus* and *Allium*, and an observation on the size of stomata in different species of *Triticum*. Jour. Sci. Agr. Soc. Tokyo **303** : 52—54.
- (1936). Chromosome studies in some Alliums. Jour. Coll. Agr. Tokyo Imp. Univ. **13** : 431—441.
- Morinaga, T. and Fukushima, E. (1931). Chromosome numbers of cultivated plants. III. Bot. Mag. Tokyo **45** : 140—145.
- 小 野 雄 三 (1935). ネギ屬數種の染色體數. 遺傳學雜誌 **11** : 238—240.

朝 比 奈 泰 彦 *Cladonia* 屬 の 分 類*

(Yasuhiko ASAHINA : The classification of the genus *Cladonia*.)

Wainio は Monographia Cladoniatrum universalis (1887—1897) で世界中の *Cladonia* をまとめ 4 亞屬とし、其内の Cenomyce 亞屬を 2 節、6 亞節、5 列、2 亞列に分割し總計 132 種とした。Wainio の種は極めて廣義のもので幾多の變種及品種を含で居るが Zahlbruckner の Catalogus Lichenum universalis Bd. **4** (1927) 及 Bd. **8** (1932) で計算すると 223 種となつて居り、其増加は變種又は品種の獨立種への昇格も少くないが全くの新種も相當多數ある。Wainio 分類の基調は primary thallus の性質、皮層の性狀、子柄に穿孔の有無、子器盤の色彩と系統的發生の程度で成立する。然し近頃になつて Wainio の分類に不満を懷く學者もボツボツ現はれたが未だ根本的の改正を行つた具體案はない。其内注目に値する案は Mattick 1938 (Beihefte zum Bot. Centralbl. **58** : 215—234) のそれで講演者は其梗概を説明した。

東京大學醫學部藥學教室

*) 昭和 22 年 4 月 3 日 總集會講演要旨。